

# 全都覺醒賦

北原白秋

青空文庫



## 上

静かにすゝむ時の輪しづかのときわ

軋きしりつたへて幽かすかにも――

白光はかう、小鳥ことりにゆるゝごと

明日あすの香かゆらぐ夢ゆめの浪なみ

薄うすむらさき紫むらさきにたゞよひて

白帆しらほ張はりゆく霊れいの舟ふね

円まるらに薫かほる軟そよかぜの

千里ちさとの潮しほの楽がくの音ねと

ひとが息吹いぶきは力ちからある

いのちの韻しらべ、永とこ久しへに

血ちの脈みやく搏はくと大閨おほやみの

沈黙しんまやぶりに響ひびくまで――

神澄みわたる雪の夜の  
しんす ゆき よ  
 聖きひと夜を神秘なる  
きよ よ くしび  
 天の摂理と黙示との  
あめ せつり もくし  
さとり おごそ  
 悟うるべく厳かに  
ふみまぐわん  
 書万巻の廬をいでゝ  
ゆき すゞ  
 雪に清しき頬をうたせ  
われ  
 我 鶴 のよそほひに  
かくしやう  
 鵝毛みだるゝ玉階を  
がもう たまはし  
 木々の白彩すりぬけて  
きゞ しらあや  
 台にのぼれば雲霽るゝ  
だい くもは  
 天は金沙の星月夜  
そら きんさ ほしづきよ  
 あふけば諸辰十二宿  
あふけ しょしん じゆうにしゆく  
 銀の瓔珞かゞやかに  
ぎん やうらく  
 宝座をめぐる天宮の  
みくら てんきゆう  
 靈彩高く、端嚴と  
れいさいたか たんごん

華麗を尽くし真無量  
 善美まつたく整へば  
 燦爛として聖天に満つ  
 永劫の光明と歡樂に  
 頌歌あふるゝ微妙さと  
 香華みだるゝ眩ぼゆさに  
 渴仰熱つく跪つき  
 涙のごひてさらにまた  
 燃ゆる瞳をめぐらして  
 闇に下界をうかゞへば  
 広量無辺音円う  
 包み繞らす雪絹の  
 無塵の衣、水の帯  
 無垢清浄のしろ銀の  
 衾白彩ひきかつぎ

譬へば、仏陀、無憂樹の  
 栄光の花ふる瑞かけに  
 蘇生浄化の果をひそめ  
 いま寂滅の落暉を  
 瑞雲くだる白蓮華  
 諸天諸菩薩比丘比丘に  
 優婆夷優婆塞うちめぐる  
 蓮座にかほる大菩提  
 拈華微笑の尊とさに  
 しばし涅槃に入ることく  
 いと安らかに厳かに  
 あゝ天が下、天ぐもの  
 そぎたつきわみ、畳なほる  
 青垣山の山脈の  
 むか伏すかぎり、八百潮の

潮しほの八百路やほぢの冲津波おきつなみ  
 辺へにたつかぎり、秀ほつ国くにの  
 権威ちからと光栄さかえつかさどる  
 全都ぜんとの偉靈みれい二百万にひやくまん  
 率こぞつて白日ひるの戦闘たゝかひの  
 その激げき甚じんと繁雜はんざつに  
 痛みいた傷きずつき倦うみ疲つかれ  
 闇やみにしばらく——白雪しらゆきに  
 大傘おほがさかざし、深ふかみどり  
 褪あせず枯かれざる驕たかぶり慢りに  
 白日まひる、天あめの日ひあひしらひ  
 夕ゆふべ、月つきの輪貫わらぬきて  
 夜天やてんの宿しゆくさゝを支さへつゝ  
 世よの盛せい衰すいをひやゝかに  
 千歳ちとせの曆こしよみひるがえし

神さび立かんてる常盤木ときはぎの  
 古ふるるにほひきにほひ匂におひにたゞずみて  
 更さららくにくすくかくせばめ眼めにく暗くらくき  
 九くひやくちやう百ひやく九くひやくちやう町しづのしづ静しづまりしづに  
 柳やなぎややなぎなやなぎぎやなぎのいへ家いへをも守もり  
 冷つめたひかうおほち光ひかるおほち大おほち路おほちのひ灯ひ  
 小かうぢ路かうぢはかうぢ暗くらくしく、やまうど病やまうど人やまうどの  
 夜よるのおそれ恐おそれ怖おそれにち血ちもひ冷ひえひし  
 頬ほにし沁てみし照しるし燭しのひ火ひか  
 小こまど窓まどをあを洩あをれあをてあを青あを白あをう  
 一いつてん点てん二に点てんさにゆてんらてんげてんる  
 聴きけたつみばしやうだい異いにい、い聖しやうだい代だいの  
 新しんりやう領りやうかさんぜんりけてさんぜんり三さん千ぜん里り  
 古ふる海うみめにぐるに二に千せん里りの  
 闇やみのも日とよのも本もと四よ方もにみ見みて



鎮護ちんごまします 王城わうじやうの

夜よを警いましむる 衛兵えいへいが

番つがふ言葉ことばも震ふる帯ひびび

「休やすめ」「かしこし」「寒さむつ」「ごぢり」

「さらば」の聲こえの時とき折をりに

さては安寧たいらと平和やはらぎに

市の夢いちゆめ守護もる町々まちの

巡羅じゆんらが警杖つゑもねぶたげに

ひゞく地心ちしんの骨凝ほねり

かくていよく更ふけゆけば

遥はるか水澄みづすむ大川おほかはの

魚氷うをひにのぼる勢いきほひも

夜よるの大気たいきの寒かん冷れいに

輪波耳りんばみみうちひゞくほか——

大地たいちじう静しづかにふしまろび

一夜いちやのなかに蘇よみかへる  
 生せいぞん存ぞんの気きと活くわつどう動どうの  
 大だいなる力ちから、憧あこがれ憬がれと  
 希望けいぼうの熱情ねつじやう、満みち足たるふ  
 夢ゆめに齋いつかせ、天あめひゞく  
 高たかき呼こきやう吸そくと響きやう音おんと  
 進しん歌かの律りつ呂りよ譜ふと納なめ  
 音おん閥ふとして眠ねむるかな

下

誇ほこる可べきかな常とこ闇やみに  
 長ながき沈しづ黙まを圧あつしたる  
 権ちから力を驕おごるほゝゑみに  
 いまはた、呼いき吸そくに世よを甦かへ生へす

巨<sup>きよじん</sup>人のごともうなづきて  
 我<sup>われ</sup>、鐘<sup>しやうろう</sup>楼<sup>ろう</sup>によぢのぼり  
 夜<sup>よ</sup>は余<sup>あまり</sup>ありとく醒<sup>さ</sup>めよ  
 全<sup>ぜん</sup>都<sup>と</sup>の靈<sup>れい</sup>よ、活<sup>くわつどう</sup>動<sup>どう</sup>の  
 一<sup>いつし</sup>指<sup>し</sup>に天<sup>そらくつが</sup>を覆<sup>ふ</sup>へす  
 威<sup>いきほひ</sup>勢<sup>せい</sup>しめせと大<sup>だい</sup>撞<sup>しゆもく</sup>木<sup>もく</sup>  
 闇<sup>やみ</sup>にひと振<sup>ふり</sup>、渾<sup>こん</sup>心<sup>しん</sup>の  
 力<sup>ちか</sup>らをこめて鐘<sup>かね</sup>撞<sup>つ</sup>くや  
 響<sup>ひびき</sup>殷<sup>いん</sup>々<sup>く</sup>、澄<sup>す</sup>みわたる  
 大<sup>たい</sup>氣<sup>き</sup>揺<sup>ゆる</sup>がし乱<sup>みだ</sup>るれば  
 鳥<sup>とり</sup>は驚<sup>おどろ</sup>き友<sup>とも</sup>をよび  
 緑<sup>みどり</sup>天<sup>てん</sup>蓋<sup>がい</sup>ゆるがして  
 百<sup>も</sup>千<sup>ち</sup>に乱<sup>みだ</sup>れ、白<sup>しろ</sup>銀<sup>がね</sup>の  
 箠<sup>えび</sup>背<sup>せ</sup>に負<sup>お</sup>ふ神<sup>しん</sup>将<sup>しやう</sup>が  
 引<sup>ひ</sup>き番<sup>つが</sup>へ射<sup>あ</sup>る千<sup>ちづ</sup>束<sup>かや</sup>矢<sup>や</sup>の

白羽のごとく光射し

紫雲揺曳びく九重の

大宮めぐり鳴きかはし

靄の御幕ひきかゝげ

東をさせば天津宮

闇の夢戸を押ひらき

いま日の神のいでましに

光白駒、飛ぐるま

万の栄光、千々の彩

百の照姫従へて

白銀の輪の小軋に

雲は彩湧く時をのせ

まづ灰白む東雲を

天に薄するゝ星くづの

光の権者、靈清よく

ちよみがきやうおん  
地に蘇る響音の

かす  
幽かに更らにひそやかに

ちから  
力こもりぬ、ほの／＼と

あさけ きり ゆる  
朝明の霧に動ぎつゝ

くひやくちやう  
九百九町はやはらかに

さ  
醒むるよ。嘗つて夜を高め

あめ  
天ゆくだせし洗礼の

ゆき  
雪に五濁をそゞげばか

ろくこんきよ あき  
六根清く晶らかに

りく  
離垢の法土を現するよ

あさ きあさ こえ  
されば朝の気朝の声

きよ さは  
清くすゞしく爽やかに

みづ りん は  
水に輪うち波をつたへ

やま こまく  
山の鼓膜にひゞくかな

ひ もと かん  
それ日の本は神ながら

神かんづまります古国ふるくにの

秀真ほつまの国くにの朝あさぎよめ

四方しほう清すずしき宮霧みやきりに

烏帽子えぼし、水干すゐかん白彩しろあやの

禰宜ねぎが拍手かしばで、寒祝かんのり詞と

朗ほがらに澄すむや神殿しんでんの

大氣たいき森しんたり朝神楽あさかぐら

はや鑿とうく々とうくとうちいづる

時ときに聖ひじりは先覚せんかくの

慈眼じがんめぐらし数珠じゆずく操りて

うつや鉦鼓しやうこの律幽りゆうに

霧きりにむせびて三寶さんぼうの

清きよきほこりは雲くもに入り

澄すみて菩提ぼだいをさそふべう

伽藍がらんの朝あさは磬けいの音ねに

はた鐘かねの音におのづから  
 清すし浄じやうど土つちのかしこきを  
 涙なみだにあふぐ市いちびとが  
 耳みみをよぎりてあきなひの  
 声こえはなやかに、辻つじ々の  
 車くるまの軋まき、鈴すずの音おと  
 足あし駄だ、華はな靴ぐつ、雪ゆきに鳴なり  
 繁しげく急せ忙わしくなりゆけば  
 いまか市場いちちばは武蔵野むさしのの  
 果実このみ、青物あをもの、北国ほつこくの  
 紅あけは林檎りんごに、極きよく熱ねつの  
 禾くわ木ぼく、花はなぐさ、花はなたまき  
 彩あやに人ひとよぶ賑にぎわひに  
 美うつくし子こらは入いりみだれ  
 朝眼あさめすゞしく惑まどふらむ

さては魚河岸舟つくや  
 えどは勇健の肌の彩  
 江戸は勇健の肌の彩  
 美しく脛に手に活きむ  
 うつすねて  
 魚の幾千澆漉と  
 うをいくせんはつらつ  
 銀の鱗をひそらかし  
 ぎんうろこ  
 海の新香を飛ばすらむ  
 うみにひか  
 こなた森なる学堂の  
 もり  
 雪の門守、ねそびれし  
 ゆきかどもり  
 寝惚がほなる笑止さに  
 ねほけ  
 悶ぬけば夏海の  
 かんぬき なつみ  
 うしほ  
 潮のごとくひたよせて  
 みだ  
 乱れ入る子の後ろかげ  
 さちけもつ ひか  
 幸と希望に光る見よ  
 み  
 と見る真紅は朝ぞらの  
 しんく あさ  
 雲を彩どり譜をそめて  
 くもいろふ



霧きりにながるゝ美うつくしき  
 時ときいま、百ひやくの工こう場ちやうに  
 軋れきこく輾おとの音おとうまるれば  
 黒煙けむりのぼるよ笛ふえ鳴なるよ  
 朝あさはいよゝ新あたらしく  
 生いき存ちからの力をどよもして  
 霧きり晴はれゆけば遠とほ海うみの  
 朝あさの青あをはや、眉まゆせまる  
 秩ちくぶ父とほ遠やま山つく、筑つ波ば山やま  
 富ふじ士し、白しら雪ゆきの冠かんむりに  
 玲れい瓏らうとして玉たまのごと  
 朝あさに臨のぞむよ。こみやこの都  
 あはれ不ふ滅めつの精せい力りよくに  
 歓よろこび喜こびあれよ幸さちあれよ  
 驕たかぶり盛はえあれよ光はえ榮えあれよ

いま悠々<sup>ゆうく</sup>と高照<sup>たかひか</sup>り  
 驕慢<sup>きやうまん</sup>栄ゆる天日<sup>てんじつ</sup>は  
 時の白駒<sup>しろこま</sup>駆りすゝめ  
 白銀<sup>しろがね</sup>の鞭<sup>むち</sup>、金の馬具<sup>きんばぐ</sup>  
 輪車<sup>りんしゃ</sup>軋<sup>やし</sup>らす光道<sup>かうどう</sup>の  
 十方<sup>じつほう</sup>かけて煌々<sup>かうく</sup>と  
 投ぐる金<sup>きん</sup>の矢銀<sup>やぎん</sup>の矢<sup>や</sup>に  
 赫奕<sup>かくやく</sup>として照<sup>て</sup>りかへす  
 朝<sup>あさ</sup>の光<sup>ひかり</sup>に新<sup>あら</sup>たまる  
 都<sup>みやこ</sup>の聲<sup>こゑ</sup>よ。憂<sup>かつぜん</sup>然<sup>ぜん</sup>と  
 いま噪<sup>さうぜん</sup>然<sup>ぜん</sup>と囂<sup>がうぜん</sup>然<sup>ぜん</sup>と  
 あら蘇<sup>よみがへ</sup>る活<sup>くわつ</sup>動<sup>どう</sup>の  
 力<sup>ちから</sup>、火<sup>ひ</sup>となり熱<sup>ねつ</sup>となり  
 電<sup>でん</sup>力<sup>りよく</sup>となり、生<sup>しやう</sup>類<sup>るい</sup>の  
 血<sup>ち</sup>となり燃<sup>も</sup>ゆる肉<sup>にく</sup>となり

茲こゝに全ぜん都との繁はん榮えいと  
 高たかき権ちから威とこしを永とこ久しに  
 人ひとを円まじ満かにすゝむると  
 千せん万まんの聲こえ雜ざつ然ぜんと  
 遂つひに溢あふれて漲みなぎりて  
 天てん部ぶ貫つらぬく激はげしさに  
 あゝ地ちに匍は匍へる六ろく尺しやくの  
 短たん軀くにひそむ精せい力りよくの  
 偉い大だい不ふ滅めつをままさに見みる  
 高こう台だいの朝あさ、樹じゆ下かのひと  
 あゝ讚さん嘆たんと青せい春しゆんの  
 感かん涙るいせちいにうちむせぶかな



# 青空文庫情報

底本：「白秋全集」 二 岩波書店

1984（昭和59）年12月5日発行

底本の親本：「早稲田學報第百拾貳號」 早稲田學會

1905（明治38）年1月1日発行

初出：「早稲田學報第百拾貳號」 早稲田學會

1905（明治38）年1月1日発行

※初出時の署名は「[#割り注] 早稲田大学「#改行」高等予科文科生「#割り注終わり」北原隆吉（射水）」です。

※「蘇《よみかへ》る」と「蘇《よみがへ》る」、「神」に対するルビの「しん」と「かみ」と「かみ」、「白銀」に対するルビの「しらがね」と「しろがね」の混在は、底本通りです。

入力：フクポー

校正：岡村和彦

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 全都覚醒賦

北原白秋

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>